
魔法係長桜井秀子

高柳 総一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法係長桜井秀子

【Zコード】

N7352Y

【作者名】

高柳 総一郎

【あらすじ】

何もつかめなかつた女の、最後に残つた小さな希望の残り澤。

この物語は、桜井秀子という女が希望の残り澤から見つけた、大きな使命の物語。

(pixivでも同様の作品を投稿しています)

「係長、おはようございます」

自分より少々年上の部下が軽くお辞儀するのを見て、桜井秀子の一日は始まると言つていい。『六道商事企画課係長・桜井秀子』のメールアドレスを立て、パソコンのスイッチを入れる。社内メールリストの受信箱は珍しく空だつた。係長は他の平社員をまとめるという重要な役職だ、と個人的に秀子は思つてゐる。当然、リーダーである自分にメールが来ていないと、ういう事は、それだけトラブルが起らなかつたという事の印だ。それは秀子にとって喜ばしい事であつたし、同時に少しつまらない事でもあつた。

基本、商品企画といふ仕事はそれをひねり出すのが大変なだけで、それを売るのは販促部や営業部の仕事だ。しかも、六道商事は文房具の一流メーカーとして日本に君臨する会社であり、特に油性マジックの国内シェアは四十パーセントを誇つてゐる。もちろん、秀子もこの間まで新型ボールペンの企画・開発に携わつていたが、そんな事は非常に稀だ。大ベストセラーがある会社と言つるのは、それが電化製品や食品を扱つてゐるので無いなら尚更。その商品に頼り切つてしまつて、いふのが普通だ。今回のボールペンでも、あまりよい顔をしてくれない上司を口説き落として着手したものだ。まあ、私に絶対の自信があつたわけじゃないけれど。

キャリアウーマンというのは、ある程度の地位が無いといけないと秀子は考へてゐる。何故なら、女性が職場に居続けることを快く思わない男性の上司が未だに居るのも事実であり、そういう上司は大抵いい人ぶつて、早く結婚したらどうだ』と良いところのボンボン

を紹介したがつたりする。それを断るには、会社が手放したくても手放せないほどの根を張る つまり地位を手に入れなければならぬ。

だが、私は凡人だ。

パソコンから田を離し、メガネを取つて目をこする。秀子は今年で三十四歳になつた。だが、相変わらず同じ生活が続いている。上司に頭を下げ、部下を怒鳴り、会議をして、パソコンの前に座り、疲れたと思う暇も無く会社の人間と飲みに行く。たまにバッティングセンターに行つて、あたりもしないのに部下や同僚の手前喜んで見たりする。大学をぎりぎりで出て、親のコネで何とか就職した会社で、毎日毎日同じ日々を過ごしている。

この前など、田舎の年老いた母がまたお見合いの話を持つてきた。この格差社会が進む日本で、自分より年収が上で、なおかつ自分を愛してくれるような男がどこに居るというのだろう。人生は短い。もう三十四歳だと言うのに、結婚しても、待つてているのは老いだ。自分が愛した男に、そんな苦労はして貰いたくない。苦しむのは自分だけで良い。秀子はそう思つていた。

「係長、お茶とコーヒー、どちらにします？」

秀子は、コーヒーしか飲まない。十二年も勤めてここで同じ時を過ごしている秀子にとつての『現実』を知らない部下を見る。二交代くらいの、まだまだ自分は大学生です、と言いたそうな顔がそこにあつた。三十四歳ですに、眉間にナイフで切りつけたようなしわがある自分とは、随分と違つていた。しわひとつ無い美しい顔。可愛らしいえくぼ。仕事一筋で生きてきた秀子には、もはや何一つ残つて無いものだった。

「係長、あのう……」

「コーヒーで良いわ」

羨ましかつた。羨ましいあまり、彼女を見つめすぎたかもしね。もしかしたら、嫌われてしまつただろうか。そんな事を考えている内に、デスクにはいつの間にかコーヒーが置いてあつた。ご丁寧に、

白濁としたミルクが黒いコーヒーを侵食していた。

秀子はミルクが飲めなかつた。

『調べによると、男は意味不明な供述を繰り返しており』

TVのニュースでは、相変わらず同じような出来事が延々と流れている。秀子は、そんなニュースを聞き流しながら、喫茶店で昼食のフレンチトーストを食べていた。同じように昼食をとるような同僚は居ない。二年前に、同期入社の最後の子が結婚し、それきりだ。次の年の年賀状には、幸せそうなその子と、夫が笑顔で写っていた。さつさと地球は滅亡しないのかしら。

秀子は元々温厚なほうだが、最近年のせいか少々愚痴っぽくなつてきいていた。そんな自分が、秀子はたまらなく嫌だつた。核戦争による地球滅亡のシナリオを考え始めたころ、店の扉が軋むように開いた。会社に程近いこの小さな喫茶店は、最早レトロをとうの昔に通り過ぎているようなボロい店だ。秀子はここがあまり甘くないフレンチトーストが気に入つてゐるためにここに來てゐるが、今の若い新入社員には物足りない店だし、レトロを愛する大人さえも寄り付きそうに無いボロさ加減で、ここの一常連である秀子でさえ、何故つぶれないのかはなはだ疑問なくらい変な店なのだ。そんなこの喫茶店に客が来るというのは、一大事とも取れる出来事なのである。
：肝心の老主人は、と言ひと、あまり興味が無さそうにしてなかつたりするのだが。

入ってきたのは、でっぷりと太つた男だつた。まだ5月だというのに、いまにもはしきれんばかりのYシャツは汗染みが出来てあり、手には少し水滴がしたたつてゐるほど濡れていのハンカチを持つてゐた。どこかのサラリーマンかと思つてゐると、いつの間にか秀子の前の席に座つてゐる。空気が生暖かくなつたような気がする。男の吐息の一つ一つがとにかく不快に感じられる。……そう感じないほうがおかしい。

「すみません、桜井秀子さんですよね？」

男が息を切らしながら話しかけてくる。別に走つてきたようにも思えない、あまり関わりたくないが、目の前で話しかけられて無視する、と言つのも感じが悪い。しかも、よりによつて自分の名前をフルネームで言つている。もしかしたら、取引先の人かもしれない。

「そ、そうですが……」

しかし、誰であつたのか思い出せない。秀子は焦つた。会社員と言つのは、マナーが最も問われる職業だ。もしこの男が何処かのお偉いさんだつたりすれば、秀子に重大なダメージを与えてしまう可能性もある。一体誰なのだろう。

「本当ですか！？　いやあ、良かつた良かつた。実は私、こういう者です」

男ははちきれそうなYシャツのポケットから、少しシワの入つた名刺を取り出し、秀子に手渡した。それには『日本魔法少女協会スカラウト部門チーフ・酒木原秀明』と印刷されていた。……秀子は、自分は少し疲れているのではないか、仕事の途中で居眠りして、夢を見ているのではないか、と思つてしまつた。自分の頬をつねつてみたが、痛かった。……現実だとすれば、『日本魔法少女協会』とは一体何なのだろう。少し前に流行つた、メイドキッサなるものと同じようなものなのだろうか。秀子の頭の中で、まるでシャボン玉のように憶測が浮かんでは消えていつたが、確信を得られるような答えは得られなかつた。まず、メイドキッサなる所にスカウトされているのであれば、この酒木原と言う男は少々見当違いをしてくる。まず、秀子はそこまで美人ではない。しかも、眉間にナイフで傷つけたようなシワがある女に、

「いらっしゃいませご主人様」

などと言われて喜ぶ男が存在するのであるうか。たとえいたとしても、秀子はそんなところで働きたくは無い。

「どうやら貴女は勘違いしていらっしゃるようですね」

出されたおしごりで色々なところを拭きつつ、酒木原は言った。

「スカウトと言つても、あくまでお話を聞いていただくことを前提としています。お嫌でしたら、断つてください結構です」

酒木原は出された水を一気に飲み干した。相当のどが乾いていたのだろう。さりに老主人におかわりを促した。

「スカウト……って言われても……。一体、何のスカウトなんですか？」

秀子は、氷が溶け切つてしまつたコーヒーを飲んだ。水とコーヒーは、混ざるとやはり水が勝つてしまうようだ。それはすでに水に侵食されていた。

「魔法少女です。……プリントミスですかね？ 書いてありませんか？」

「書いてありますよ」

「では、私が言いたい事も分かりますよね」

「分かりません」

即答だつた。秀子は絶対そんな事分かりたくないなかつた。

「ん……分かりました分かりました。じゃあ、説明しましょう」秀子は、もうここを立ち去つてしまひたかつた。だが、お昼休みはまだ一時間近く残つてゐる。どうやつて理由をつければ良いのか、秀子には検討もつかなかつた。

「要するに、桜井さんに魔法少女になつていただきたいんですよ」「意味が分かりません。新手の風俗なら断ります」

「いえいえ、そんないかがわしい職業ではありません。……それにお言葉ですが、私が風俗を開くならもつとほかの人を使いますよ」秀子が男をにらみつけると、さすがに言い過ぎたと思つたのか、とてもバツの悪そうな表情を作つた。最も、手元ではいつの間にか運ばれてきたコーヒーに角砂糖を三個ほど突っ込んでいた。大して悪いとも思つていないのである。

「桜井さんは、小さいころアニメは『』覧になつっていましたか？ ほら、コンパクトを開いて呪文を唱えたり、ステッキを振つて箒を乗りますアレです」

「はあ、まあ人並みには」

「でしょ?……あ、すみません。私にも彼女と同じものをもらいますか?」

70はゆうに超えているであらう老主人がよろよろとフレンチーストを持つてくるのと同時に、再び酒木原が口を開いた。

「まあ、魔法少女と一口に言つても、種類がたくさんありますね。トラブル解決タイプ、純戦闘型徒手空拳タイプ、純戦闘型砲撃タイプ、医療従事タイプ・科学応用タイプ……数え切れないほどです。それだけ、魔法少女の需要が高いという事でしょう」

「はあ。私は実際にそんな『魔法少女』なんて見た事無いんですけど」「それなんです!」

突然大声をあげた酒木原に、秀子は驚きのあまり危うくひっくり返ってしまうところだった。

「大声をあげてしまつて申し訳ありません。ですが、桜井さんの言うとおりなんです」

「はあ」

酒木原は、じうやうの店のフレンチーストが痛く氣に入つてしまつたらしい。老主人に今度はフレンチーストを三枚頼むと、再び秀子の方に向き直つた。

「女性であるあなたに話すのは少しためらいがあるのですが……。九十年代以降、女性の性の乱れはどんどん加速しています。ご存知ですね?」

秀子は最早あきれ物も言えず、とりあえずうなづいておいた。

「それに伴つて、早くからそういう行為に及ぶ人が増え、我々が求める魔法少女の条件に合つ女性はどんどん減りつつあるのです。魔法少女になるための第一条件は処女ですからね」

「帰つていですか」

「お願いしますからもう少しだけ話を聞いてください。二十年前、全国に五千人居たはずの魔法少女は、いまではもう百人近くまで減つてしまつているのです」

「それで、私を魔法少女にしたいと。そういう事ですか？」

酒木原はしきりにうなずいた。秀子がようやく理解できたのが嬉しかったのか、首がちぎれんばかりにうなずいていた。

「お断りします」

酒木原の両眼が大きく見開かれた。……大方、まさか断られるとは思つていなかつたのだろう。

「確かに、どう調べたのか分かりませんが、私はこの年までずっと処女です。……別に興味が無かつたわけでも無いですし、機会が無かつたわけでもありません。でも、そんなわけの分からぬ職業に就いて、今の生活を捨てるような真似はしたくありません」

言えた。秀子は心中自分を褒めたい気分だつた。ここまで自分の言いたい事をはつきり言えたのも久しぶりのような気がした。だが、酒木原は笑つっていた。あれだけはつきり断られたといつのに。

「ほう、そうですか。いやいや、確かに貴女が言う事はほとんど本心のようですね」

「どういうことですか」

「貴女、一度で良いからドラマの主人公になりたいと思つたことはありませんか？」

「はあ」

「ドラマの主人公は、それが喜劇でも悲劇でも、変化と刺激に満ちた生活を送っています。まあ、主人公にとつてはいい迷惑かもしませんがね。しかし、貴女は今の変化の無さ過ぎる生活に、飽き飽きしているのではないんですか？」

「それとこれとは……」

「別だと言いたいんですか？」

確かに、図星だ。言い返す言葉も無い。

「大丈夫ですよ、桜井さん。今の会社を辞める必要なんかありません。それに、基本的には一年契約で更新性です。いやでしたら一年だけ頑張つてやめていただいて結構ですし、活動するのは夜だけです」

「どうして夜だけしか活動しないんですか？」

酒木原は鞄から書類を出しながら、こつこつと田線を畳わせずに答えた。

「魔物は夜にしか活動しないからです。大丈夫ですよ、桜井さんに十分な戦闘能力があるはずですから。……桜井さん、はんこか何かお持ちですか？ 出来れば、銀行の届け出印がいいのですが」

「ちょ、ちょっと待ってください」

何も秀子は、そんな不得体の知れない魔物などと戦うとは言っていない。確かに酒木原が言うとおり、日々の生活にはつらざりしている。毎日毎日同じようなループが続き、将来どうなるのか分からない。十一年間勤めてきた会社でも、いまだ係長だし、仕事を舐めている後輩や部下からは負け犬呼ばわりされているのを知らないわけではない。

「大体、私がそんな事をやつて、なんのメリットがあるんですか？」「もちろんあります。あなたが今勤めている会社で一生働いても得られないくらいの報酬をお支払いします。桜井さんは、結婚する気がおありじやないんでしょう？」

「そ、それは……」

「隠さなくとも、事前調査で確認済みです。老後は今のじ時勢、おひとりじや大変ですよ？ 厚生年金も出るでしょうが、結果的に貧乏で寂しい生活が待つてるのは目に見えています。協会に一時でも所属すれば、老後の生活も委託業者の超高級老人ホームで暮らせます」

いくらなんでも胡散臭い……が、秀子は不思議とそちらの怪しさを疑うのでは無く、老後の暮らしの事を考えていた。秀子は、自分がすべて苦しめばいいと思っていた。周りの人間に迷惑をかけるのだけはごめんだからだ。だが、それは逆ではないだろうか。自分が苦しむ分だけ、周りの誰かも苦しむのではないのだろうか。どんなにつっぱつても、いつかは老人ホームやヘルパーに頼るときは来るのだろう。それを自分が苦しんでいると言い張るのは、愚かしい事だ。

実際に苦労しているのは、ほかでもない老人ホームの職員やヘルパーだし、彼らに頼つて『苦しんでる』などと言つのは愚の骨頂だろう。それに、老人となつた自分の周りに、誰が居るというのだ。親は死に、友人は口クにおらず、今まで同僚に冷たく接した自分に、誰が好き好んで一緒に居てくれるのだろう。そう考へると、秀子の心の中には、不安が洪水のように押し寄せてきた。

今はいい。会社と言う居場所があるから。だが、老後はどうなる？

「あの……桜井さん？」

酒木原は、いつの間にか三つ目のフレンチトーストを食べ終わつていた。

「何でもありません」

とりあえず話を聞いてみよう。確かにわけの分からぬ話である事は間違いない。だが、秀子はそれ以上に不安に駆られていた。

「一応、その魔物とかの説明をして欲しいんですけど……」

酒木原は驚いて、思わず口に運んでいたフレンチトーストを落としてしまつた。

「ああ、そうか！ 説明するのをすっかり忘れていましたよ。まず、魔物ですが、大した事はありません。人間の悪意が生み出す化け物ですが、やつらに大した知能は無いですし、桜井さんの能力の高さがあるなら、朝飯前でしょう」

秀子にはいまいち理解できなかつた。この際、この男の話をすべて信じるとしても、秀子自身にそんな能力の高さがあるとは到底思えなかつた。大学時代はラクロス部だったが、すでにその時の能力は失われている。何を根拠にそんな事を言うのだろう。

「実は、人間には潜在的に魔力があるんですよ。その力は年をとる毎に上昇し、大体二十歳前後でピークを迎えます。三十を越えた人間は、理論上際限なく魔力が上昇するのです。しかし、先ほど言った通り、童貞や処女で無くなると魔力は無くなつてしまふのです」「つまり、私はちょうど脂のついた旬の魔法少女つてことですか」「言ひ方は悪いですが、まあそういう事になりますね。……そう言

えば、まだ返答を聞いていませんが……。どうするんですか？ 桜井さん。強制はしません。あなたの判断がすべてです」

秀子の心は意外にも揺れていた。老後を考えると、わけの分からない職業でも、ヘッドハンティングの一種だと思えばかなりおいしい。だが、この男の話が全て嘘だとしたら。自分がさつき言つたとおり、変な風俗で働かれるかもしれない。

「……分かりました。出来るかどうか分かりませんが、やらせて頂きます」

だが秀子は『今から』逃げたかった。現実から目を逸らしたいが、老後も見据えるという矛盾を孕んだ自分の欲望を満たしたかった。

「……分かりました。次は登録名なんですが……そうそう、流石に桜井さんくらいの女性が魔法『少女』と名乗るのはキツイですね」「私も嫌です」

「桜井さんは確か……そつそつ、係長でしたね。なら『魔法係長』でどうでしょう？」

「まあ、別に『少女』以外なら……」

「そうですか。なら、魔法係長で登録しておきますね」
酒木原が契約書にそう書くのを見ながら、秀子はある種の恍惚感さえ感じていた。それが自分が決断できた事に対するものなのか、今まで安全な道を通つて来たのを逸れた事への背徳感なのかは分からなかつた。だが、この男が風俗の人間だろうと、人身売買のブローカーでも、魔法少女を集めしていてもかまわなかつた。秀子にとっては、その矛盾した欲望を満たす事だけが最も大切な事だったのだから。

「……以上で、説明は終わりです。何か質問はござりますか？」「いくつか質問しても良いですか？」「どうぞ」「どうぞ」「まず、この武器は何なんですか？」

秀子の目の前には、明らかに極めた人が持つような銃が置いてあった。今更ながら、秀子はとんでもない事に首を突っ込んでしまった、と悔やんでいる。

「違いますからね。勘違いしないでください。これは魔銃トカレフです」

「トカレフって言つてるじゃないですか」

「よく見てください。グリップ……って分かります？ そうそう、その握る部分です。そこには普通は銃弾を入れる弾倉があるんですね、無いでしょう？」

確かに、何も入っていない。それに、プラスチックのように軽い。「弾は自身の魔力を込めますから、媒介さえあればなんら問題ないんです。昔はメルヘンチックで綺麗な色をしていましたが、最近シックな色がブームですから。どうです？ 大人の魅力があふれ出ているでしょ？」

むしろ青い服を着た国家権力の方々が惹きつけられそうな魅力があふれ出ている、と秀子は思つたが、あえて深く聞かない事にした。シックでない「デザイン」の事を考えたら、気分が悪くなってきたからだ。

「もう一つだけ聞いても良いですか？」

「何なりとどうぞ」

「まさかとは思うんですけど……「コスチュームとか」

「ありますよ」

秀子が言い終わるか終わらないうちに、ある意味一番肯定して欲しくない事実を肯定されてしまった。

「メイド・ゴスロリ・女子高生・少女風……。リクエストさえあれば、オーダーメイドでお作り……」

「じ、じゃあ目立たないースーツか何かを」

「しますが、桜井さんの場合、一年だけの勤務ですから、一から作りするのはもったいないですね。協会のレンタル品を使いましょう」

「う

一縷の望みが絶たれてしまった。……いや、待てよ。秀子は思い直した。酒木原はシックなデザインが流行っていると言つた。ならば、コスチュームもシックなデザインが流行ついてもなんらおかしくないではないか。

「あのう、サンプル画像とかはあるんですか？」

酒木原はベルトが少しきつくて苦しいのか、少し顔をゆがめながら、腰のポケットから何とか携帯電話を取り出した。そして、秀子に画像を見せてくれた。赤を基調としたドレスのような作りで、動きやすくするためか少しあスカートが短めになつていて。胸には大きなリボンがあしらわれており、これも派手なオレンジ色をしている。袖口にはフリフリの素材が使われているようで、それを着ているサンプル画像の少女は、まるで携帯の中で踊つているようだつた。

「……派手すぎませんか？」

「協会がスタンダードとして基準にしている、現在最高性能の魔法少女服ですよ？」

そんな事は知らない。再び秀子は気分が悪くなつた。脳内では、赤いフリフリのドレスを着て、右手に銃を握り、夜空を駆け回りながら化け物と戦う自分が居た。三十分前に自分で決めた事とは言え、あまりに軽率だった、と悔やまずには居られなかつた。

「あと、移動手段なんですが、これになります」

酒木原が再びバッグをあさり、野球ボールほどの赤い水晶玉を七つ取り出し、テーブルに慎重に置いた。

「何ですか？ これは……」

「宝玉です。これに魔力を込めると、桜井さんを乗せて飛べるようになります」

胡散臭い事この上ない。大体、魔法使いは筈に乗るものではないのか？ 秀子がそう訝つていると、酒木原が顔を覗き込んできた。

「ああ、もしかして筈を期待してましたか？」

「期待してたわけじゃあ無いんですけど」

「昔は筈だったんですよ？ ですがホラ、上昇するときの衝撃で痔

になる人が続出しまして。おまけに、田立つんですよ。幕つていうのは」

確かに、あんな柄の細いものに乗りたくは無い。……秀子は、今日始めて酒木原の言つ事に納得できたような気がした。

「さて、これで本当に私からの説明は終わりです。後ほど服をお届けしますから、メールの支持どおりに魔物を退治してください」そう言つと、酒木原は立ち上がつた。秀子が顔を上げると、そこにはもう誰も居なかつた。テーブルには、フレンチトーストの皿が三枚と「コーヒーの飲み残し、一万円札が置いてあつた。

「係長、お帰りなさい。どこまで行つてたんです？」

年上の部下が笑みを浮かべながら話しかけてきた。秀子はそれを笑顔ではぐらかすと、再びデスクに座つた。パソコンを立ち上げると、受信メールはやはりゼロだつた。会社では、また延々と同じ日々が続くのだろう。不安が無いと言えば嘘になる。だが、秀子の中では、矛盾した欲望を満たした事の満足感の方が遙かに大きかつた。酒木原から貰つた道具を、デスクの引き出しの奥に閉つた。

「あの……係長」

デスクの前に、今朝の女の子が立つていた。

「今朝はすいませんでした。私は……係長がミルク嫌いなの知らなかつたんです。本当にすいませんでした」

彼女の髪が揺れる。

「いいの」

「え？」

「いいのよ。怒つてないから。それより、コーヒー入れてくれない？」

彼女ははじめ目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻り、またあのえくぼを見せてくれた。運ばれてきたコーヒーには、ミルクは入つていなかつた。秀子が口に運ぶと、口の中にほのかな甘みが広がつた。ど

うやら、また気を利かせて砂糖を入れてくれたらしい。秀子は、ブラック派だった。

第一話『争い』（前書き）

相入れぬ二人。相反する感情。思想。譲れない思いがそこにあると
いうのなら、闘争こそすべてを決するにふさわしい。それを無謀、
野蛮と卑下し批判することは、たとえ神でも出来はしない。なぜな
ら、闘争は神が作った悪趣味なゲームなのだから。次回、『争い』。
譲れぬ秀子の決意が大地をゆるがす。

「桜井君、どうかしたのかね」

企画課課長の大川が怪訝そうな顔で部下の顔を覗き込んだ。

「何かいいことでもあつたのかね？　ずいぶんと嬉しそうだが」

「いえ、別に」

桜井秀子は、にやついていた顔をいつもの無愛想氣味の顔に無理やり戻すと、再びパソコンのモニタに向かい始めた。実際、彼女は嬉しいのだ。彼女は、彼女の枷となっていた、サイクルから外れた。その事がたまらなく嬉しいのだ。もう自分は、周りとは違う。確実に頭一つ抜けたところにいる。その優越感がたまらない。モニタに移る彼女の顔は、やはり少しこじけている。大川もまたこちらを怪訝そうに見ている。秀子は人とは違う。そんな小さな事実が、秀子の顔を落ち着かないものにさせていたのだ。

「係長、製造コストの見積もりが上がってきたんですね」

部下の報告に気づくのも数秒遅れる。秀子の脳内はまさしくお花畠状態であった。結局この口は普段ならしないようなミスを重ねる始末で、大川からの小言も右から左へ抜けていった。ふらふらとまだ夢見心地のようで、普段なら入るのに躊躇するような牛丼屋へ吸い込まれて行つた。

「おや？　奇遇ですね」

見慣れた巨体に汗ばんだ顔の男がいると思ったら、案の定酒木原だつた。普段の秀子であれば、彼を疎ましく思ったことだろう。夜八時過ぎに、いい年した女が牛丼屋でひとりでいるところなど、知り

合いには見られたくないものだ。

「酒木原さん。こんばんは」

自分でも少し声が上ずっている、と思つた。おそらくこれから起
こることに、自分自身期待しているのだね。

「わかりますよ、お気持ちは。牛丼は老若男女、どうしても食べたくなる時があるものです」

酒木原が冷水がなみなみと入ったピッチャーから、次々と水をコップに入れ飲み干していく。彼がいかに今日も汗をたくさんかいたのかがよくわかる。

「ええ。普段は一人じゃ入れません。……正直、今夜が楽しみです」「それは頼もしい限りです。今夜は初陣ですから、気負わずやってください」

店員が怒号に近い声で、酒木原の目の前に牛鮭定食を運んできた。酒木原は、味噌汁のわかめを食べおわると同時に、凄まじい勢いで牛丼をかきこみ始めた。

「先日送ったメールはご覧になりましたよね。遭遇ポイントでの魔物出現予定時刻は二時間後。レベルは三ですから、桜井さんにとつてはむしろ格下、楽勝の部類に入るでしょう。我々サポートスタッフも現場にて待機してますので、ご安心を」

と、言うような事を酒木原は言つたようだつた。半分は口の中の牛丼に阻まれ、聞こえなかつたのだから、これが正確であるなら秀子の聴覚は鋭いほうだろう。

「報酬はどうなるんですか？ そういうれば聞いてないんですけど」

「契約書、読まれなかつたんですねか？ 我々日本魔法少女協会では、年棒制を採用しています。我々の査定ですと、秀子さんの年棒は五千万となつてます」

「五千万ですか！？」

予想外の破格であつた。秀子が魔法少女などといふざけた仕事を引き受けたのには三つ訳がある。ひとつ。秀子は、酒木原の『老後の不安』という言葉に恐怖を覚えた事。ふたつ。秀子は、このまま

の退屈で単調な人生に飽いていた事。最後に、経済的にも豊かになると酒木原に言わされたからである。

秀子は単なるサラリーマンである。経済的には一人暮らしで問題ない。だが、都内のマンションで寂しく過ごす今の生活に、何の魅力があるのだろう。何もない。今から結婚しても、たかが知れている。せめて老後くらい、豪勢に暮らしたいと思ったのだ。豪勢といつても、少し贅沢が出来ればいいと思つていた矢先にコレである。棚からぼた餅ということわざがよく似合つことだろう。

「ま、なんにしろ十分な報酬かと思います。……なんども言いますが、くれぐれも気負わずやってくださいね」

いつの間にか、牛鮭定食は空になつていた。本当に酒木原は食べるのが早い。彼の特技ともいえるのでは無いだろうか。

「それでは、遭遇ポイントで会いましょう

酒木原は千円札を席に置き、去つていった。

薄暗い廃工場がそこに広がつていた。今回の遭遇ポイントは間違いないここのはずだが、酒木原のいうサポートスタッフの姿は見当たらない。

「……『変身』」

秀子がぽつりと呟くとほぼ同時に、秀子は完全に『変身』を完了していた。燃えるようなオレンジ色のフリフリドレス。片手には持つてきた黒い銃『魔銃トカレフ』が握り締められている。

「……どこにいるのかしら

つぶやいた声が拡声器を通したように響いた。同時に、雷鳴が轟くような音がした。今日は雨は降らないと朝の天気予報で言つていた。それに、さつきまで月が見えるほどきれいな夜だった。突然雷が鳴るわけがない。何事かと考え込んでいると、今度は非常に癪に障る

ような甲高い笑い声が工場中に響き渡った。

「ここに会つたが百年目！ 情報通りにやつてきやがつたわね！」
甲高い。キンキン響く声は秀子の耳を塞ぎたいという欲求を満たす
のに十分なものであつた。女の声は反響に反響を重ねており、どこ
にいるのか分からぬ。

「私の私による私のための騎士！ あの女をやーつておしまい！」
再び響く甲高い声を合図にしたのか、地面が揺れ始めた。何かが来
る。女のカンと言つべき物が、秀子がその場から突き動かした。案
の定、地面が風呂桶の栓を抜いたように渦を巻き始め、その真ん中
から何かが姿を現した。泥で出来た人型の何かが、先ほどの雷鳴と
聞き間違うような咆哮をあげた。

「なんなのよ、もう！」

トカレフを構え、トリガーを引く。光線が泥人形を穿つ。雷鳴が轟
く。だが、泥人形は動きを止めなかつた。泥が、まるで間欠泉が噴
出するようにせり上がり、泥人形がそれに腕を突っ込む。すると、泥
で出来ているのかよく分からぬが、棒状の物体が泥人形の腕に握
られていた。

「あたしの『ロードナイト』はそんなもんじゃ無駄よ！ カリバー
ンを持つてしまつたロードナイトを止められる魔物はいない！」
大体、人間が動かす魔物がいるなんて事があるのか。いや、酒木原
は何度も『言つておかなくてはいけないもの』を忘れる事が多い男
だ。『魔法少女が動かす魔物』が居てもおかしくないではないか。
そんなことを考へてゐるうちに、カリバーンの一閃が迫る。泥の
もつイメージから、鈍重かと思つてゐたが、とんでもない。鋭い一
撃を確実に叩き込んでくる。もちろん、トカレフを何度も打ち込ん
ではいる。だが、この魔銃トカレフの特徴として、連射すると威力
が落ちるようなのだ。只でさえさつきの太い光線が聞かないのに、
泥人形にしてみれば、蚊に刺される程度だろう。そもそも、この泥
人形に痛覚が存在するのかさえ怪しい。

「どおーしたのかしらあ？ 言つとくけど、降伏なんて許さないん

だから！」

オレンジのフリフリドレスのおかげで、身体能力も多少は向上している。だが、中身はこの前まで「ぐごく普通の女だったのだ。百戦錬磨の戦士のようにはいかない。しかも、正確無比で叩き込まれるカリバーンのおかげで床は凹んでおり、くぼみのひとつに足をひっかけ、すっ転んでしまった。

「ぐつ……」

「魔物のくせに魔法少女の真似をするなんて、なかなか生意氣ね。おつ死になさい！」

カリバーンが無情にも振り下ろされる。情け容赦ない死が迫っている。思えば、短い人生だった。だが、秀子は思う。自分は何を成したのだろうと。人は一生をかけて、何かを成す。だが、自分は何を成したというのだ。富も、名声も、地位も、友情も、恋も、何一つ成していない。それで生きてきたと言えるのか？

じゃあ、このまま死ぬべきだろうか。カリバーンは、地面にめり込んだ。

お世辞にも美しいとはいえない、多少茶色になりつつある金髪をなびかせつつ、工場の奥から一人の女が姿を現した。ビビットピンクでレースのついたひらひらのドレスを着込み、手にはこれまでピンク色の杖のような物が握られている。

「さすがね、私のロードナイト。貴方は最高よ。ビューチフルよ。

それでこそこのミッキー様の奴隸にふさわしいわ！」

ミッキー、と名乗る女は、甲高い笑い声を上げた。

「動くな！」

「動くな、といわれて動く人間なんていないわ」

ミッキーが後ろを振り向くと、恰幅のいい男と、黒い服を着込み、銃を持つた数人の男が立っていた。

「あらあ、久しぶりね、酒木原さん。聞いたわ、貴方出世したんですね？」

「そんな事は今関係ないですね。堀田三津子さん」

「私をその名前で呼ばないで！」

ミッキーこと三津子は、酒木原の言葉に態度を豹変させた。

「まさか、もう七人衆が動いたのですか？」

三津子は答えない。

「一体何をするつもりなんです、七人衆は。これは明らかに契約違反ですよ。魔法少女同士が争うなど、絶対にしてはならないんです！」

「黙りなさいよ！ 私が戦っているのは『魔法少女のフリをする魔物』よ。別に契約違反などではないわ」

「七人衆たる貴女が、そのようなわがままでは困ります」

「黙りなさい！ 何が七人衆よ！ 私は私よ。七人衆じゃない！」

泥人形が咆哮を上げる。カリバーンを再び振り上げ始めた。

「総員退避！」

酒木原達は万が一のため、常に最低限の武装をしている。だが、今回の大魔物は低レベルとの報告を受けていた。魔法少女に対抗できる装備など、携行しているはずも無い。それほど、魔物と魔法少女には埋めがたい差が存在するのである。

「私は堀田じゃない！ 三津子でもない！ これからは『魔法少女ミッキー』としてひとりで生きるの！」

カリバーンが酒木原たちに襲い掛かる。地面が穿たれる。酒木原たちはごくごく普通の一般人であるため、カリバーンの一撃などを食らえればひとたまりも無い。ひき肉になるのがオチだろう。

「この魔法少女ミッキー様が、宇宙で一番自由なの。誰の命令だつて聞けばしないわ」

三津子のテンションはそれこそ最高潮に達している。酒木原は内心焦っていた。泥人形自体は、一般に『魔物』のカテゴリーに入る。そもそも魔物とは、社会構造上発生する、感情の『カス』の塊だ。パ

ソコンが定期的にデータのクリーニングをしなければならないように、社会というひとつの中のシステム構造体は、『魔物』という力で生きる。現在の複雑な社会は、それだけ様々なタイプの魔物を出現させているのだ。今回、酒木原が『至極普通の』魔物だと判断したのが間違った。魔法少女の中には、自分が直接手を下すタイプのほかにも、いわゆる『召喚師』タイプが存在している。彼女たちは、いわば負の感情を人工的に爆発させ、それを構成物質として自分の僕を生み出すのである。堀田は、『召喚師』タイプの魔物少女としてかつて一線級の活躍をしていた女だ。ある事情により衰えてしまった今でも、魔法少女協会最大戦力の七人を示す、『七人衆』の一人に数え上げられている。それがこのように身勝手なことをされたのでは、サポート側としてはたまつものではない。

「チーフ、どうしますか？ 堀田の魔力は桁違いです。しかも今の我々の装備では泥人形を突破して堀田を確保する事は難しいです」「そうですね。しかし我々がまずすべき事は、桜井さんの救出です。堀田をひきつけて、桜井さんの救出をすることだけを考えましょう」酒木原は冷静だった。ベテランの彼にとっては、予想範囲外の出来事などめったに起こりはしない。だが、今回は状況がますますすぎる。

(まさか桜井さんが押し負けるとは)

秀子が負けるという可能性を、正直酒木原はほとんど考えていなかった。いや、考えていないといふのは流石に言い過ぎだったが、本当にこういう状況に陥るとは考えもしていなかつたのだ。いくら魔力が高くて、経験が無ければ意味がない。酒木原はそう考えた。買いかぶりすぎていたせいで、自分たちの慢心のせいだ、秀子は恐らく命の危機に瀕している。それだけは確かな事なのだ。

「チーフ！ 桜井さんはあっちです！ こちらで堀田を引き付けます！」

「三分あれば大丈夫です！ お願ひします！」

数人のスタッフが、携行している手榴弾のようなものを泥人形に向かって投げる。一般的な爆発を引き起こすものではなく、一種のブラックホールを発生させるものである。ブラックホールが引き寄せることは、『魔物が纏う魔力』。魔物が『負の感情が変質したもの』であるために、魔力をいわば皮膚のように纏い、自身の形が崩れないようにしているのである。魔物とほぼ同じ構造を持つ堀田の僕にも十分効果があるのだ。そうしてブラックホールは、泥人形の纏う魔力を引き寄せ、消滅させ始めた。絶大な効果とまではいかないだろうが、泥人形を引き付けるくらいは可能なはずだ。

「桜井さん！ 起きてください！」

返事は無い。秀子が着ているものは、魔法少女協会の誇る最新型のスーツである。たとえダンプに轢かれようと、露出している頭に衝撃が無ければ、骨折すら防ぐ事ができる。とは言え、自分より五倍以上の大きさのある泥人形の一撃を食らつたのだから、脳震盪くらいはおこしても不思議ではない。魔法少女同士の戦いは、お互いの死を招くほど激しいのである。

「起きてください！」

「起きる前に殺つてやるわよ」

堀田の甲高い声が響く。時間切れだ。目の前には、泥人形がカリバーンを構えた状態で聳え立つていた。まさに絶体絶命である。

「完全なるトドメというヤツを刺させてもらつわ」

カリバーンが振り下ろされる。

流石の酒木原も、秀子を抱えて逃げる事は不可能に近い。秀子はともかく、自分が死を逃れる事は出来ない。死は経験できない。それは誰であつても例外ではない。酒木原は自らの死を覚悟することは出来なかつたが、迫つてきている死を感じることは出来た。

何時間がたつたのだろうか。永遠にも近い時間が過ぎたような気がしたが、酒木原はすぐにそれが間違いであつたと確認する事が出来た。生きている。

「何もやっていない」

桜井秀子が立っていた。先ほど彼女の事を『買い被りすぎた』などと言つた酒木原だが、その発言をすぐに撤回しなければならぬ状況である。何故なら、彼女は魔鏡トカレフを掲げ、それでカリバーンを受け止めているのである。いくらブラックホールで魔力を減らし、多少なりとも弱つている泥人形の一撃であつたとしても、その重量まではどうにもならなかつたはず。何よりも、彼女は先ほど死の一歩手前まで行つたはずなのだ。そんな彼女が、スーツによつて『死ぬ事はない』事を分かつていても、こうまでして堂々と攻撃を受け止め、立つていられるというのだろうか。

「私はまだ何もしていないんです」

「は、はあ……」

「死ぬことは簡単です。諦めれば、多分死ぬんでしょう。でも私はまだ諦めたくない。だつて私は、まだ何も成していないから」

堀田は愕然としていた。泥人形は間違いなく質量を持つていて、トランクくらゐは余裕で押しつぶせる。いくら素晴らしい耐久度や能力を持つていても、質量には勝てない。質量こそ力の全てなのだ。

「あんたはどうして潰れないの？ どうして？」

「話す必要はありません。私にも分りませんし」

「何だかよく分からぬいけど、貴女はこのミッキー様に喧嘩を売つてるようね……」

「それなら一生そう思つてればいいじゃないですか。知つてます？」

「嫉妬をする女は結婚出来ないそうですよ？」

「魔法少女にそんな事言つてもしようがないと思つわよ？」

「少女つて年でも無いでしよう？」

水を打つたような静寂がその場を支配した。酒木原は長年の感覚で、

この勝負が一瞬の元で決着がつくと直感した。秀子の雰囲気が違う。堀田も今までのふざけた態度を取つてはいない。両者とも、実力のある魔法少女であり、そんな二人が不器用ながら本気を出している。それがどれほどの物かは、酒木原には理解し得ない。ベテランのサポートスタッフとはいえ、魔法少女同士が本気を出して戦うなどのような事が起きるのかなど、理解の外にある。事例がほとんど無かつたのだ。

「やつちやいなさい！ ロードナイトオ！」

咆哮。雷鳴の轟くような咆哮。カリバーンが再び秀子を襲つた。トカレフから太い閃光が放たれ、カリバーンを穿つ。碎く。泥人形には、それだけで反撃の手段は無い。カリバーンを復元するにも時間がかかる。秀子の勝ちがほぼ確定した瞬間であつた。

「ば、馬鹿な！ このミッキー様のロードナイトが！」

「大したことないんですね、ロードナイトなんて大層な名前の割には」

宝玉を靴底に仕込み、魔力を足にありつけ込める。秀子はその反動によつて宙に飛び出した。ほとんど無効化された泥人形などもう怖くは無い。堀田を守るものは、もう無い。城壁は崩れたのだ。

「桜井さん！ 堀田を、本体を叩いて下さい！」

「分かりました！」

秀子は腕を引いた。宝玉の推進力と、スーツによる身体能力の向上で、パンチを放とうとしているのだ。堀田も魔法少女の端くれとはいえ、一般的な女性である事は間違いない。一撃入れることが出来れば、それで勝負は決する。

「あんたなんかに、このミッキー様は負けられないのよオ！」

堀田もまだ諦めてはいない。時間を稼げば、再びカリバーンを復元する時間も稼げる。まだ勝負は互角なのだ。秀子の拳が、堀田のスティックを叩く。

「やるわね」

「貴女こそ」

にやりと笑みが浮かぶ。考える事は一人とも一緒だった。堀田は秀子の拳をステッキで受け流し、秀子はトカレフで拳にあわせ、直撃を避けた。もちろん、二人は今日始めて出会うし、秀子にいたつては人生で初の殴り合いである。というか、人生でここまで本気で、しかも女性同士で殴りあう事などあるのだろうか？ だが、一つだけ確かなことがある。秀子は、高揚感を感じていた。拳を交える事によって、高揚感を感じるなんて、秀子には初めての経験であった。秀子は、堀田と殴り合いながら、自分の性癖はもしかしてサドなかもしれない、などと冷静に考えていた。

「だけどねえ、勝つのはこのミッチー様なのよ！」

堀田は持っていたステッキを秀子に向けて振り下ろした。トカレフで殴打を受け止めた秀子だつたが、それが間違いだつた。ステッキは折れ、トカレフは衝撃でトリガーが碎けてしまったのである。

「折れちゃいましたね」

「あなたのもね」

堀田は躊躇無く、拳を突き出した。綺麗な右ストレートが、秀子の鼻に決まる。今度はメガネのフレームが折れた。

「折れたわね」

「ええ。貴女の悪趣味なステッキより大切なメガネのフレームがね」秀子は痛みを我慢しつつ、堀田の腹に拳をぶち込んだ。立つていられない。いつ食べたものかは知らないが、胃の中の物が吐しゃ物として、血と混じりながら堀田の口から流れ出した。いくらスースが優秀でも、衝撃を完全に無くす事は不可能なのだ。ここまでくれば、秀子も容赦はしない。今度は腹に蹴りを入れる。身体能力が上がっているためか、堀田の体が多少浮いた。

「降参、しますか？」

「黙りなさいよ」

堀田はもう立つていられない。が、彼女の魔法少女としてのプライドが地に伏せる事を許さなかつた。強引に大地を踏みしめ立ち上がる。

「やせ我慢にしか見えませんが

「貴女、耳は大丈夫なの？ ミッチー様が黙つてろつて言つたのよ

？」

吐しゃ物と血で塗れたビビッドピンクのドレスのポケットに手を突つ込み、何か丸いものを取り出した。宝玉である。秀子の物と色も大きさもほぼ同じ。それを、手に握りこみ、拳を作る。

「私の顔にこれ以上傷なりなんなり作るわけにはいかないのよ」

「奇遇ですね、私も同じなんです。明日は朝一で会議があるんですよ」

秀子も同じように、宝玉を握り込む。今度こそ決着をつける。一人の女が考へている事は一緒であった。田の前にいるいちいちムカつくこの女をハツ倒す。秀子に至つては、当初の『アルバイト目的』から既に大きく脱線してしまつてゐる。今は、田の前にいる堀田を殴り倒す事のみを考へている。人に頭を下げて生きるサラリーマンである普段の秀子なら考えられない事だ。

そもそも世の中には、暴力で解決できる事というのは少ない。あるにはあるが、それは一般人にはどうしようも出来ない、『法』や『権力』などの社会機構に捕らわれてゐるから起つて逃れ得ない事象なのである。だが、目の前のこれは捕らわれない。権力や法や金や上下関係、これらに一切関係ない。獸が子孫を残すための闘争のようなもの。人間もどとのつまりは獸である。獸が前に進むため、生きるため、闘争して何の問題があるのであらうか？ 闘争は社会に捕らわれたりしないのだ

「正直言つて、貴女なかなかやるわね。」ミッチー様をここまで追い詰めるなんて

「お褒めの言葉どうもありがとうござります。貴女みたいな勘違いに言われても嬉しくないですけど」

お互い拳を固め、引き、対峙する。

「引く気は無いのね？」

「その言葉、そっくりそのままお返しします

弓から矢が発射されるように、拳が放たれた。一人の拳は綺麗に直線を描き、お互いの拳を捕らえる。廃工場には、風を切る音と硬い物がぶつかる音が響いていた。次第に一人の拳は血で染まり、腫れ上がつてきつつあった。何度も言うようだが、彼女らはスーツを脱げば只の人間、生身で殴り合えば、拳のほうが悲鳴をあげる。そもそも、魔法少女は長く戦う事を想定されていないのである。ましてや、銃撃特化タイプの秀子や、召喚師タイプの堀田なら尚更である。二人は確実に消耗しつつあった。

「さつさと死になさい、このクソメガネが！」

「貴女のような厚化粧に引くわけにはいきません！」

秀子の赤い拳が堀田の顔を捕らえ、彼女を吹き飛ばす。柱が砕け、粉塵があがる。コンクリートに突き刺さった堀田の体は、それから動く事は無かつた。

「私は、何かを成してみせる。負けるわけにはいかないんです」

突き上げた拳は、廃工場の屋根の隙間から照らされる月の光を浴びて、鮮やかに赤く光っていた。秀子は勝つのだ。それは、変貌を遂げた彼女の最初の勝利であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7352y/>

魔法係長桜井秀子

2011年11月26日18時53分発行